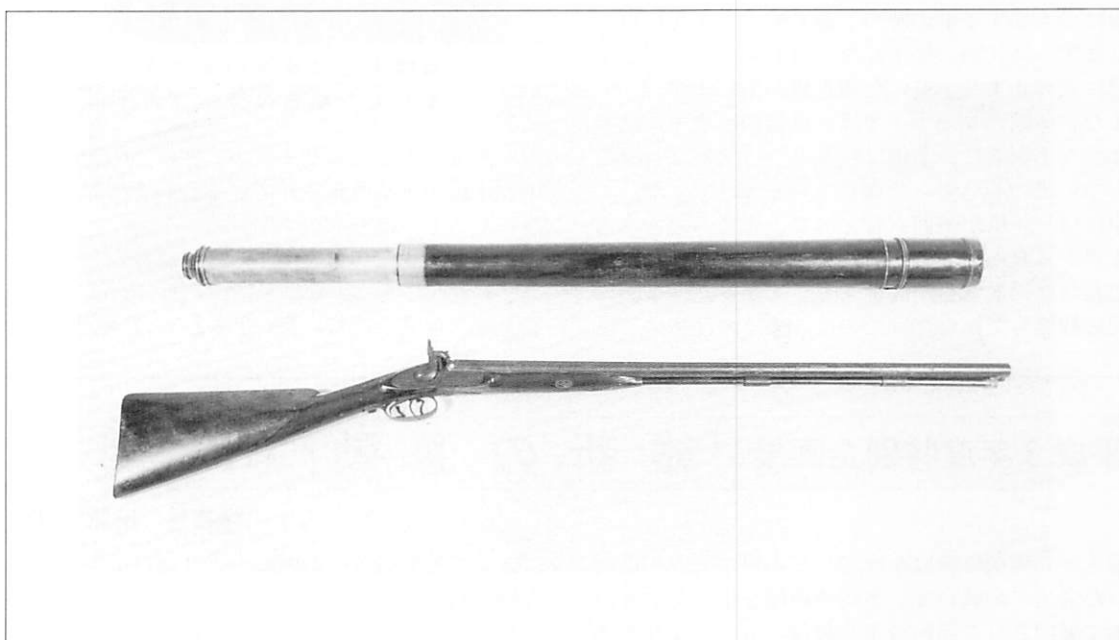


伝・ブラキストンの 望遠鏡と銃



津軽海峡に名を残した英国人、トーマス・ライト・ブラキストンは、函館にもっとも縁の深い外国人ではないでしょうか。ブラキストンは、1861年(文久元)に一度函館を訪れ、その後1863年(文久3)～1883年(明治16)までの20年を函館で過ごし、製材所経営などの事業の傍ら、鳥類の研究をおこないました。この鳥類研究の成果が、津軽海峡を挟み本州と北海道の動物分布の違いとして発表し、後に有名なブラキストン・ラインと呼ばれるようになるのです。

ここに紹介する資料は、ブラキストンが使用していたと伝えられている望遠鏡と銃です。望遠鏡は真鍮製、最大長117.0cm、対物レンズ口径7.0cm、銃は全長116.0cm、口径1.7cm、前装滑腔式二連発で、点火機下に2羽のキジの絵とFT. BAKERと書かれています。どちらも1910年(明治43)の函館図書館「ブラキストン函館渡来五十年ならびに没後二十年祭」に、ブラキストンの遺品として出品されていました。詳細についてははっきりした資料がなく、今後さらに調査を進めていく必要がある資料のひとつです。

〈学芸員：尾崎 渉〉



トーマス・ライト・ブラキストン

平成3年度特別展「懐かしのおもちゃ展」報告

学芸係長 岡田 一彦

それぞれの時代の「おもちゃ」には、その時々起きた事件などを反映したものが多くあります。

今回の展覧会＝玩具で見る日本近代史＝「懐かしのおもちゃ展」は、遊ぶために作られたり、使用した「おもちゃ」を通じて、その時代の世相を理解してもらおうという企画でした。

特別展の本館開催は久しぶりのことですが、ちょうど、お花見時期が会期で、家族連れが多く観覧しておりました。

誰にでも必ず子供の時の「おもちゃ」の思い出があります。時代順に展示した「おもちゃ」のどこかで急に立ち止まり、遊んだ頃を思い出します。

また、体験のコーナーでは、母親のお手玉の曲芸のような手捌きに、子供は唖然とし、父親は自分の知らない妻の若い頃を想像しているようでした。

中には、子供が何回も行くので、来てみたら本当に面白かったというお父さんもおりました。

これだけの展覧会が開催することができ、多数の市民に観覧していただけたのは、多くの団体のご協



函館大谷幼稚園の園児さんを
まじえた初日のテープカット

力があつたことによりますが、特にこの大成功は多田敏捷氏が快く所蔵されている資料を出品して下さったことによるものです。

会期中、19,248名の多くの方々にご覧いただき、われわれ博物館職員として今後の市民に喜ばれる博物館の展覧会開催の良い手本となったと思われま

平成3年度特別企画展「維新の激動」報告

学芸員 田原 良信

幕末から明治維新にかけて、日本中が大きく揺れ動いた各地での戦いは、当時の箱館を中心とする蝦夷地で展開された箱館戦争が最後のものとなりました。この戦いをテーマにした特別企画展「維新の激動—箱館戦争をさぐる—」が、平成3年6月から博物館五稜郭分館において開催され、9月までの期間中74,000人を超える方々に観覧いただきました。

今回の特別企画展では、江差町教育委員会のご協力により、開陽丸関係資料を多数出品していただき、艦船および海戦を重点とした箱館戦争のいきさつの紹介といった展示構成にしました。明治元年コーナーは、蝦夷地上陸から、松前方面の攻略そして蝦夷地仮政権の樹立に至る旧幕府脱走軍の攻勢を中心とし、明治2年コーナーは、新政府軍の反撃から箱館総攻撃そして五稜郭明け渡しに至るまでの、約7か月に及ぶ戦いの変遷を描くことにしました。

陸戦のイメージの強い箱館戦争の中に、海戦関係の資料を多く取り入れたこともあって、艦船の果たした重要な役割について、改めてご理解いただけたのではないのでしょうか。ただ、五稜郭を訪れる方々

にとって箱館戦争への関心、とりわけ土方歳三など人物に対する人気は非常に高いものがあります。しかし、これに応えるだけの資料はまだ多くはなく、今回の展覧会においても十分なものとは言えませんが、明治維新という激動の歴史の一端を多少なりとも楽しんでいただけたことと思います。



箱館大戦争図

平成3年度企画展「ブラキストンと函館」報告

学芸員 尾崎 渉

昨年は、ブラキストン・ラインの発見者として知られるトーマス・ライト・ブラキストンが亡くなりちょうど100年にあたります。このことから当館でも、土木部公園緑地課のご協力により、改めてブラキストンの函館に残した業績、我が国の自然科学発展に寄与した点などにスポットを当てた展覧会を企画し開催いたしました。

10月22日～12月22日までの62日間、本館第1展示室を会場に、事業家、鳥類研究者としてのブラキストンを紹介、そして自然科学を築いた外国人、函館

山の自然コーナーも含め、4つのテーマを持たせた内容としました。

ブラキストンと聞くと、どうしても鳥類研究者としてのイメージが強いですが、今回の展覧会では、事業家として函館を舞台に活躍した彼を理解していただけたと思います。



伝・ブラキストン使用のデスク

平成3年度 教育普及事業報告

今年度は科学教室11回、市民講座15回の計26講座開催され、715名もの多くの方々に参加していただきました。特徴としては、市民講座を特別展と関連させて、小学生対象の「子どもの遊び」シリーズを5回開催、また、函館を離れた史跡めぐりバスツアーを行ったことでしょう。

今年度は、受講する方が実際に体験するといった、親子で楽しく学べる講座を多くした結果が、参加者の増加につながったと思います。今後、博物館により親しんでもらうためにも、楽しく遊びながら学べる講座内容とし、その中で参加される人が「なぜ？」



母と子の
土器づくり会

と考える「きっかけ」を与えていくことが重要ではないでしょうか。

〈学芸員：尾崎 渉〉

考古資料目録作成準備の整理作業

博物館に収蔵されている考古資料には、函館を始めたとする道内各地などから採集された、旧石器から縄文・続縄文および中世の各時代にわたる多種の遺物があり、その数量は膨大なものがあります。

この内訳としては、昭和23年に函館図書館から引き継いだ旧蔵資料および寄贈資料、昭和24年から昭和47年度までの発掘調査資料等があります。その中に、明治時代初期の函館博物館創設期に採集されたものや、北海道考古学の黎明期に調査されたもの、さらに北海道・函館市指定有形文化財となっているものなど、著名なものが数多く含まれています。

平成元年度から本格的に整理作業が開始され、今年度までに主だった資料についてはほぼ整理の目処がつけましたが、展示品以外の研究用資料や参考資料の分類整理については、さらに一年程度の時間が

必要な状況です。このように、現在は多数の資料分類に追われていますが、明年度以降にはこれまでの整理の成果として、昭和47年度までに収集された考古資料についての目録を刊行する予定です。

〈学芸員：田原 良信〉



整理作業をおこなう臨時職員の方々

研究と資料

もう一对の「ペリー提督寄贈の洋酒びん」を探る

—資料調査余滴—

学芸係長 岡田 一彦

市立函館博物館所蔵の「ペリー提督寄贈の洋酒びん」と同様のものが、「紅ビードロ瓶」と称しているが、茨城県立歴史館に所蔵されている。

ペリー提督が来日中、青色の同型西洋徳利を浦賀奉行に贈ったという説があり、また一橋徳川家に赤色で一对と揃っていた。

この「紅ビードロ瓶」の形はほぼそっくりで、高さ24.5cm、低径11.1cmである。主任研究員の小川知二氏によると、由緒書などは無く、水戸一橋家の棚に裸で置かれていたとのことである。今後、水戸一橋家関係の文書から手掛りが発見できればという。

さて、当館の「洋酒びん」だが、高さが23.4cm、低径が10.2cmで、少々低めということになる。

ペリー提督は嘉永7年、日米和親条約を締結すると視察のため箱館に向かい、4月15日に3隻が箱館に入港した。ついで4月21日にはペリーの乗ったポーハタン号とミシシッピー号が入港している。

この洋酒びんは、当時酒や雑貨を商い、箱館の町名主でもあった小島又次郎にペリー提督が贈ったものであると伝えられていた。この小島又次郎の妹は、五稜郭の築造で有名な武田斐三郎の妻で、武田斐三郎はペリー提督箱館来航時に箱館に来ている。

この小島家に伝わっていたものを、花光春之助氏が入手し、当館に寄贈した。

この瓶を昭和43年10月から12月にかけてワシントンで開催されたスミソニアン研究所主催の「ペリー展」に出品した。この時スミソニアン研究所で鑑定され、以後この瓶はペリーが来航したときのアメリカ側の数少ない資料の一つとして、昭和54年11月3日函館市指定有形文化財に指定されている。

ペリーが来航したことは、日本史上大きな事件である。箱館が開港され、発展の大きなきっかけであり、そのペリーが箱館に来たという証として、この「洋酒びん」は貴重な資料となっている。

これからの調査によるが、他の日本人にもこの型の洋酒びんを贈っていたとも推察され、応接に係わった大名の倉などに、まだ眠っているのではなかろうか。



茨城県立歴史館に収蔵されている「紅ビードロ瓶」

研究と資料

函館山とクマゲラ

学芸員 佐藤 理夫

現在、市立函館博物館の展示室に、クマゲラが営巣木として利用したトドマツの風倒木と写真を飾っている。このうち、風倒木は、函館市街の北側に位置する横津岳のふもとにある中野ダム周辺で使われたものである。

ところで、市立函館博物館の東側に位置する函館山では、クマゲラが、昨年(1991年)の9月20日から十数回観察されている(1992年2月8日現在)。函館山は周囲9km、標高約334m、面積約326haの落葉広葉樹を主体とした山である。ここに雌雄各1羽が姿を見せるようになったというわけである。

とはいっても、函館山に、過去一度もクマゲラの確認がなかったわけではない。1988年9月23日～1989年3月27日の間に雌雄各1羽が数回観察されている。この時は、函館市街を通過して函館山とは反対側の山から飛んできたものと私は考えている。

今回のケースは、観察回数が多いことを除けば、1988年～1989年当時の状況に似ているように思う。つまり、クマゲラの出現が登山道沿いに集中していることである。このことは、登山道沿いや観光道路沿いのカラマツやハンノキ類などの食痕跡の多さにも顕著に現われている。さらに、早朝の観察もあり、クマゲラが函



クマゲラの食痕跡

函館山に定着しているような印象を受けるが、明らかではない。

なぜクマゲラが函館山に姿をみせるようになったのだろう。これについては、キツキ科のオオアカゲラが、ここ2、3年姿を見せるようになったこと、さらに他のキツキ科のアカゲラ、ヤマゲラ、コゲラの観察回数が多くなっていることを示しているように、登山道沿いに採餌木となりえる枯木が多くなってきたためと思われる。

クマゲラが繁殖するためには「200～300haの広さをもつくわばり」が必要である」といわれる。

函館山は十分にこの条件を満たしている。では、なぜ、クマゲラは1989年に函館山で繁殖することがなかったのだろう。

「クマゲラが繁殖に必要な樹木の胸高直径は50～100cm必要である」という。しかし、これだけの太さをもつ樹木はスギ以外にはあまりない。しかし、スギを営巣木として利用している例は見当たらないことも事実である。このことから、函館山では、巣箱がそれに代わるものを利用するしかクマゲラの繁殖は不可能のように思われる。

研究と資料

五稜郭人物伝 1 土方歳三

学芸員 佐藤 智雄

土方歳三は、天保6年(1835)5月5日に武州多摩郡石田村(現東京都日野市石田)の富農の家に四男として生まれました。父隼人義諱はすでに亡く、6歳で母を失い、家督を嗣いだ次兄喜六によって育てられます。11歳になると丁稚奉公に出されますが、長くは続かず郷里へ戻る事になりました。

当時は経済が発展する反面、物価の高騰に治安の悪さも加わり、打ち壊し等の騒動が多く、富を貯えた農民は、自衛のため身分制度に反し自ら剣を取り、私設の道場を開いて修業を積むようになります。歳三も姉のふの夫、佐藤彦五郎の家にある天然理心流の道場に入りし、やがて代稽古に来る近藤勇と知り合い、江戸私衛館に寄食しました。

文久2年(1862)土方は、近藤らと武士になるべく浪士隊に参加し上京、会津公に嘆願し、後に新撰組を結成します。副長となった土方は、池田屋事件や禁門の変などで名を揚げ、慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦いに破れ、流山を経て宇都宮・今市・会津と転戦して、仙台から榎本の率いる旧幕府脱走艦隊に加わり、蝦夷地へ向かいます。

鷲ノ木に上陸した土方は、一隊を率いて箱館を目指し五稜郭を占拠、松前・江差の攻略など蝦夷地平定に活躍し、蝦夷地仮政権では陸軍奉行並に選ばれました。翌明治2年(1869)宮古湾急襲作戦、二股の攻防などに活躍をしますが、5月11日箱館総攻撃の日一本木関門(現函館市若松町付近)突破を計り被弾、戦死と伝えられています。旧幕府脱走軍の将官中、戦死者は土方歳三ただ一人でした。当時35歳。

掲載した史料は、新撰組中島登筆の「戦友姿絵」に描かれた土方歳三です。陣羽織姿で描かれた土方の姿絵にはつぎのように追慕が記されています。

元新撰組副長

陸軍奉行



戦友姿絵より

土方歳三
行年三十八

土方ハ武品八王子ノ産ニシテ近藤ニ從テ京師ニ在テカス生質英才ニシテ飽迄剛直ナリシカ年ノ長スルニ從ヒ温和ニシテ人ノ婦スル事赤子ノ母ヲ慕フカ如シ退京ノ後奥羽ニ英名ヲ止メ蝦夷島ニ渡リ縷々美名ヲ顯ス
明治二年五月十一日函館瓦解ノ時
数兵ヲ卒テ猛虎ノ群羊ヲ驅テ
荒走スルカ如ク無ニ無ニ奔巡リ
終ニ乱彈ノ中ニ狙撃セラレ馬上ナカラ討死ス三軍ノ衆痛惜ノ聲没ス

世ノ豪傑ト謂フ可シ

この書の奥書に「予忠義箱館弁天台場ニ囚容ト成テ僅ニ寸志ヲ吊ント欲シ死友ノ肖像ヲ画テ後談ノ端ト為ス」とある。京都から箱館まで、道と同じくした者が見た将としての土方を著すには正鵠を射たものと思われま。

平成3年度新収蔵資料紹介

今年度12月31日までに41件の資料を下記の方々よりご寄贈いただきました。今後も函館に縁のある資料を収集いたしますのでよろしくお願いいたします。

○寄贈資料

- 火山弾 1件
【榎 正三氏寄贈・函館市本町35-19】
- 達磨大師木像 1件
【日角善作氏寄贈・函館市船見町13-5】
- 脇差 他 3件(3点)
【竹田純一氏寄贈・函館市末広町5-13】
- 書 1件
【白鳥 廣氏寄贈・函館市亀田本町56-14】
- 櫛と筭 1件
【松橋ノブ氏寄贈・函館市港町7-5】
- 函館開港五拾年紀年全圖 1件
【砂金 努氏寄贈・岩手県水沢市神明町2-1-40】
- 縄文土器(完形) 他 6件(4,281点)
【函館中部高等学校考古学部顧問
原田 豊氏寄贈・函館市時任町11-3】
- 自在鉤 他 6件(6点)

- 【本川キミエ氏寄贈・函館市弁天町10-15】
- 日本人形 他 6件(8点)
【熊谷康一氏寄贈・函館市弁天町11-12】
- ゲロリ 1件(2点)
【川南サチ氏寄贈・函館市青柳町26-9】
- 独楽 1件(40点)
【西澤勝郎氏寄贈・函館市湯川町3-43-12】
- 平塚常次郎像 1件
【保管替え・函館市総務部秘書課】
- 8ミリ映写機 他 6件(21点)
【星野四郎氏寄贈・函館市亀田港町23-17】
- 木植 他 4件(4点)
【坂本光太郎氏寄贈・函館市宇賀浦町16-22】
- ハンドトラクター 他 2件(4点)
【横山 實氏寄贈・函館市石川町252】

○購入資料

- 翁ノ図 1件
- 蝦夷人帰途之図 1件
- 雨窓紀聞 1件

新職員紹介「新人ですよしく！」

今年度は学芸員2名が新採用となり、あわせて、庶務係員も人事異動により3名発令されました。博物館に新たに加わった職員をご紹介します。



佐藤理夫(さとうみちお)

自然科学担当学芸員。
専門分野は、野鳥の生態及び渡りに関する研究です。特に函館山や道南の野鳥観察については、永遠のテーマとして取り組んでいきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

佐藤智雄(さとうのりお)

歴史・考古担当学芸員。
青森から北上し、市立函館博物館の学芸員となりました。専門分野は、考古学ですが、五稜郭分館に勤務しているため、もっか五稜郭について勉強中です。よろしく！



佐藤太子(さとうたいこ)

平成3年5月1日付で博物館勤務となりました。本館の窓口を担当しています。博物館の顔?としてこれからもがんばりますのでよろしくお願いいたします。



太田道俊(おおたみちとし)

物品の購入、予算関係など博物館の経理を担当しています。発令されて1年程過ぎ、ようやく慣れてきました。博物館の資料の多さにびっくりしています。



松本雅子(まつもとまさこ)

五稜郭分館の窓口を主に担当していますが、函館以外の街からのお客様が多いことにびっくりしています。五稜郭関係の資料が豊富に展示されます。ぜひおいでください。

Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ— No.31 1992. 3. 15発行

編集・発行 市立函館博物館 (TEL.0138-23-5480)

北海道函館市青柳町・函館公園内(〒040)